



国際化の最前線から



丁寧迎え入れる

～日本生活へのソフト・ランディング支援～

和なびジャパンは、2011年の東日本大震災後の混乱の中、地震をほとんど経験したことがなく、不安を抱えていた外国人家族に対し、情報面・心理面から支援を行うことから始まった。チャリティとして開催した防災ワークショップは口コミで外国人コミュニティに広がり、企業・大使館・教育機関・自治体などから依頼をいただくようになり、設立から9年が経とうとしている。ニーズに応える形で「食」、「医療・救急」、「子育て」、「対人マナー」、「ビジネス慣習」などにプログラムを拡充してきた。

和なびジャパンのワークショップは、①日本社会の制度・文化への理解を深める講義、②カルタやピクトグラム（絵文字）を取り入れたサバイバル日本語講座、③体験型のアクティビティという三部構成をとっている。これは、参加者が日本社会のしくみを理解し、言語の壁があっても重要な情報にアクセスし、自力で課題を乗り越えられる力が身につくよう、工夫を重ねて設計したものである。

多様な外国人の支援に携わってきて痛感するのは、言語化されていない日本の文化・習慣の分かりにくさ、そして何より日本語習得の困難さである。不自由なく生活できるレベルになるには長い時間を要するが、漢字だらけの食品表示から、食べられる食材を読み取って購入し



日本社会・文化理解のための講義の様子

(一社)和なびジャパン 共同代表理事 木村 素子

たり、症状に合わせて病院を選んで受診したり、来日直後から生活を成立させるために対処すべきことが多々ある。



サバイバル日本語のアクティビティの様子

近年、行政サービスの多言語化は大きく進んでいるが、例えば、「避難所」の存在すら考えたこともない人は、行政がホームページをいくら多言語化しても、自らその情報をとりにいく必要性に気付かない。

ワークショップで日本の社会のしくみや文化的な背景を解説すると、言葉のプレッシャーが軽減して安堵するのか、参加者の表情は明るくなる。孤立や分断を防ぐためにも、こうした日本生活へのソフト・ランディング（軟着陸）支援の大切さを実感する。

外国人を丁寧に迎え入れ、日本社会のあり方を改めて見直し、全ての人々が安心して暮らせる社会にアップデートしていく過程は、日本人自身が日本の伝統と文化の魅力を再発見し、社会に活気を生み出して行く過程でもあると感じる。さまざまな機関と連携して活動を深めていきたい。

プロフィール

木村 素子（きむら もとこ）

慶應義塾大学総合政策学部卒業。国際協力銀行（当時）で円借款を通じた復興支援・平和構築プロジェクトなどを担当。NPOで難民認定の法的支援業務に携わった後、留学生や難民・庇護希望者のための日本語教育に取り組む。東日本大震災を機に、防災教育を中心に在住外国人の日本社会へのソフト・ランディング支援を行う非営利団体「和なびジャパン」を設立。現在、共同代表理事。一橋大学大学院 経営管理研究科 国際企業戦略専攻 非常勤講師。